第77回日本内科学会講演会（1980年）

シンポジウム 受容体と疾患*

司会 九州大学医学部第三内科 井林 博
司会 京都大学医学部第二内科 井村 裕夫

司会者のことば

SYMPOSIUM ON RECEPTOR DISEASES

Moderator : Hiroshi IBAYASHI, MD

The Third Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine, Kyushu University

Moderator : Hiroo IMURA, MD

The Second Department of Internal Medicine, Kyoto University School of Medicine

INTRODUCTORY REMARKS

シンポジウム「受容体と疾患」を只今から始めたいと思います。本日のシンポジウムは特に笹本会頭のご意向により、up to dateのテーマの一つとして取り上げられたものであります。受容体すなわちreceptorの名称と概念は、すでに今世紀初頭 Ehrlich博士が抗毒素および抗体産生機序の研究で提唱しました有名なSeiten-Ketten Theorieの中に登場しております。この側鎖説におけるレセプターの考えは特異的結合の概念として「鍵と鍵穴」との関係に類似性を求めております。その後このレセプターの考えは薬理学の領域に伝承され、Ahlquistらによるカテコールアミンの「 α , β 各レセプター学説」の提唱となつております。一方臨床的には、古くからホルモン不応症の成因としてmetaphysicalな意味の「受容体異常」が想定されてまいりました。1972年Cuatrecasasにより肝臓および脂肪細胞の細胞膜のインスリン受容体の

分離と部分精製の成績が初めて発表され、インスリンその他ホルモン受容体は従来の概念的なものから改めて具体的かつ実態的な存在として把握され注目されるに到りました。現在受容体の名で呼ばれるものとして、ご承知のように化学的受容体のほか、血管系の圧受容体とか、感覚受容体、浸透圧受容体などの物理的受容体や、ウイルス受容体、免疫に関与する受容体など広範多岐にわたつております。しかし、その物理化学的な実態として同定されたものはそのごく一部にすぎないのが現状であります。本日は内分泌代謝疾患、血圧調節、重症筋無力症、免疫異常などの内科各領域において最近話題となつている受容体異常と病態を取りあげ、その現状と問題点について解説してまいりたいと思います。

受容体自身の完全な精製、可溶化が未完成な現段階におきまして、本日のシンポジウムは「受容体と疾患」すなわち clinical receptorologyともいふべき新しい疾患概念に関する「序説」に止まるかとも思いますが、ご清聴をお願いいたします。

*本シンポジウムは1980年4月5日、東京都港区芝公園3-3-1、東京プリンスホテル鳳凰の間にて行なわれた。